

書 評

谷田博幸『ヴィクトリア朝百貨事典』

(河出書房新社、2001年)

岩田 託子

谷田博幸『ヴィクトリア朝百貨事典』は、こういう本があればいいな、と夢想していた本だった。あればいいのはわかっているが、つくるのは大変だろうから、手にすることもなかりうと思っていて。それが、突然苦も無く手に入ったわけだから、驚いたし嬉しかった。

出版にいたった風向きの変化については、著者「まえがき」に概括されている。政治や経済、外交、法制といった国家の命運にかかわる大事こそが歴史家にとって正統な研究対象だと考えられていたなかで、未曾有の経済的發展を遂げ、一大消費大国となったヴィクトリア朝の中流階級の人々が享受する物質的豊かさの実際が注目されるようになったのは、比較的最近の動きである、と。

たしかに邦訳文献をとってみても、ダニエル・ブール(片岡信訳)『19世紀のロンドンはどんな匂いがしたのだろうか』(青土社、1997)、クリスティン・ヒューズ(植松靖夫訳)『十九世紀イギリスの日常生活』(松柏社、1999)など、あいついで出版されたのもここ数年のことである。これらの書物がときほぐしたのは、19世紀英国の人々の暮らしぶり。作家が腕をふるい生き生きとした魅力を放つことになった細部が、一見主筋に関わらないように見えながら、実は主筋を支えていることが明かされた。だが、これらの書物は読みもので、その解説的説得力は棄てがたいが、一目瞭然とはいかない。

『ヴィクトリア朝百貨事典』の強みはまさしくこの一目瞭然。「もの」に語らせる、「もの」語り力である。河出書房「図説」シリーズの一冊なので、図を目で追いキャプションを読むだけでも、好奇心をひととおり充たすように作られている。

著者には『極北の迷宮』なる著書もあり、もはやイギリス美術史専門家の枠にとどまらない。しかし、やはりヴィジュアル、グラフィックな感覚が強みと見受けられる。ここに引かれた図版は、油絵あり、写真あり、雑誌や小説の挿絵、広告ありでヴァリエティーに富み、飽きることがない。

自分が一目瞭然を好むのは、初めて手にした研究費で買い揃えたのが OED では

なく *I・See・All* だという「もの」好きだからである。「もの」には、時代の叡智、技術・科学・美意識、時に愚かなまでの人間の願望が込められていると信じている。だから、「もの」についての蘊蓄はいつも楽しい。*I・See・All* は、図版と短いキャプションだけという禁欲的のつくりであり、蘊蓄がないのは少し残念に思っていた。それにひきかえ『ヴィクトリア朝百貨事典』では、百貨ならぬ八十品目が、事の大小や軽重にかかわらず、事典らしく五十音順に並び、いずれ劣らぬ啓蒙的な解説文がつく。

例えば、「パピエ・マシェ」。この事典のおかげで初めて納得した。これまでも現物は目にしてきたし、触れたこともある。製法などは辞典類をひけば書いてある。しかしながら腑に落ちなかったのは、なぜこんなものをわざわざ作るのか、ということだった。それが、「中国趣味がもてはやされる中で生まれた東洋漆器の安価な模造品を指す」と指摘され、そうだったのかとすっきりした。あの光沢と色使いに柄行きは、東洋漆器を目指しつつズレたからだとすれば、パピエ・マシェというしるものを理解できる。

「ボウラー・ハット」も読んで得した気分になった一頂である。トップ・ハットとの違いやその後の帽子デザインの変種にふれられていて、十分もの知り気分になれるのだが、それだけではない。ウィリアム・コリンズ<田舎の礼儀>が図説される。描かれているのは、田舎の子どもたち。誰も帽子などがぶっっていない。しかし、その真中の少年が前髪をひっぱるしぐさは「馬上の訪問者(路上に影)に対して脱帽がわり」のしぐさなのだ読み解かれている。これは、まだ知らない人に教えたくなる蘊蓄である。

ところで、かの時代について「もの」知りになれることだけが本書の効用ではない。ヴィクトリア朝から断絶せず今も続く「もの」も多いので、現代英国文化にまつわる謎まで解けた気になった。例えば「フィッシュ&チップス」。世界で最も有名と自称するハリー・ラムズデンのチェーン店が第一号店を開いたのは、北イングランドのブラッドフォード下町。ここで、英国アカデミー賞受賞作品「ぼくの国、パパの国」(ダミアン・オドネル監督、1999年)を思い出す。ブラッドフォードのパキスタン街も、フィッシュ&チップスの店も舞台設定に入っているからだ。映画では、パキスタン移民のパパは英国人妻と一緒に近隣の街でフィッシュ&チップスの店を切り盛りしている。・・・これを例えば、関西のどこかで地元出身の妻とお好み焼き屋を切り盛りする移民と置き換えれば、設定自体の面白さが伝わらないだろうか。なんとか子どもたちにパキスタン流の結婚をさせたいパパの悲願、悪戦苦闘ぶりも一層きわだつというもの。

さらに云えば、両親が離婚したために別れて暮らしていた姉弟の再会と禁断の愛を描く『クローズ・マイ・アイズ』(スティーヴン・ポリアコフ監督、1991年)。姉が結婚する相手シンクレアは青年実業家。胡散臭い成り上がりではない、祖父の代

にマーガリンで財を成した資産家三代目という設定。それにしてもなぜことさらに「マーガリン」が、前から気になっていた。気になりながら調べなかった自分の怠慢は後めたいが、『ヴィクトリア朝百貨事典』では、もう調べはついている。マーガリンが「世界最初の合成食品であり、最も成功した代用食品」であり、また、「十九世紀いっぱい英国はマーガリンの大半をオランダからの輸入に頼っていた」と教えられた。ならば、映画に戻ってシンクレアの祖父の時代には、一山当てる急成長産業の可能性を英国のマーガリン市場は持っていたということだろう、と納得した。

それにしてもラファエル前派の研究者というイメージが強い著者だけに、また最近も、ヴィクトリア朝絵画について「闘うヌード」と銘打って(『芸術新潮』2003年6月号) そのなまめかしい美の世界に耽るがごとく解説した同じ著者が、アイロンや石鹸やマッチなど硬派(?)な「もの」を俎上に載せ、とうとうと説いたとなると、あらためてその守備範囲に驚く。そういえば、決してラファエル前派ではない「もの」いろいろのコレクターである著者の一面を仄聞したことを思い出した。

『ヴィクトリア朝百貨事典』は、すでに研究者のあいだで重宝され引き合いに出版されている。さきごろ出版された『<インテリア>で読むイギリス小説』(ミネルヴァ書房、2003)でも、複数章で参考文献にあげり言及されていた。小説に描かれた「もの」を、まず理解したい。さらには、そこから何かを見通したいという文学研究者の思いが、この本に向かわせるのだろう。そして、この願望は学際的研究を目指す「ヴィクトリア朝文化研究学会」を発足させ、底から支える会員の望みに重なっているだろう。

会員は、目下のところ多数を文学研究者が占めている。作家テキストを読むことと文化研究を並列させようとする意識の現れであろう。文学研究者はテキストを読む過程で、謎をかけられ続けてきたわけだが、謎のうちのあるものは語学的な問題としてだけでは解決できない、文化のコンテクストに置くべきものであったはずだ。研究者は知らない「もの」を読み解き謎を解きながらここに到ったし、これからは後も読解はまだまだ続く。

例えば、アン・ブロンテ『アグネス・グレイ』で遭遇する“desk”はなんとも奇妙な机ではなかったか。まず4章、アグネスがガヴァネスとして初めて赴任したブルームフィールド家でのこと。手におえない子どもたちが共謀してアグネスに悪戯をしかける。隙を突いて兄が妹に命令する「先生の机を窓から投げつけてしまえ」。『わたしの大切な机には、手紙や書類、僅かとはいえ現金、貴重品一切合財が入っていた』。この机が三階の窓から投げ捨てられようとするところを、すんでのことでアグネスは救出する。もうすぐ六歳になるという子どもが窓から投げ捨てようとする机とは・・・。

そして19章、未亡人となった母のもとにその父親から手紙が届く。もともとこの結婚に反対だった彼は、娘が結婚を悔いて赦しを請えば、アグネスたち孫にも遺

産を分けようと云うのだ。憤った未亡人は父に拒絶の手紙を書こうとして、「アグネス、わたしの机をもってらっしゃい」と命じる。

持ち運びできる机があったわけだ。OED 1b. に的をえた説明がある。単に“desk”では分りにくい、“slope desk” “portable writing desk”とバラフレーズできて、「携帯用書きもの机」とでも訳すべき女持ちの道具がかの時代にはあった。今でも骨董屋などで見ることができる。傾斜した蓋を開けると、中に筆記用具がはいっている。なにぶん電気もガスもふんだんに使えない時代ゆえに、女性は灯火と暖をもとめてこのような「机」を持ち運び、書きものをしたという。これは図版をつけて、『ヴィクトリア朝百貨事典』の項目に滑り込ませたかった、わたしの蘆蓄の一つである。

テキストを真摯に読むものならば、この程度の謎解きはどなたも経験のあることだと思う。講読の時間などに、調べたことをついつい説明しすぎて、困惑する学生の表情に我に返り・・・という覚えのない方もおるまい。

このような蘆蓄も、今後さらに集成していくべきではないか。本学会を機縁として、各人手持ちの蘆蓄も横断的に活かしようのではないか。書評者は、そのように願っている。

『埋もれた風景たちの発見 ヴィクトリア朝の文芸と文化』

(中央大学人文科学研究所 2002年)

玉井 暲

本書は、イギリス・ヴィクトリア朝文学がもっている特有な多様性と豊饒性を、この文学の正典を形づくるのに大きな力を発揮した作家から、正典からいくらか逸脱した俗にマイナーと称される作家に至るまでの十数名の作家を取り上げ、その代表作品を綿密に読解することによって明らかにしようとした論文集である。「はしがき」のほかに、十三編の論文が収められている。

ヴィクトリア朝の作家といっても、本書では、詩人が中心である。取り上げられる詩人は、主に、ジョン・クレア、テニスン、アーノルド、コヴェントリー・パトモア、クリスティーナ・ロセッティ、ロバート・ブラウニング、ウィリアム・モリス、ホプキンズ、オスカー・ワイルドからなる九人である(第一部)。これらの詩人の群像は、ヴィクトリア朝英詩の大きな山脈を形成する代表的詩人をほぼ網羅しているから、本書は、したがって、基本的にはヴィクトリア朝詩人論と受けとってよ

かろう。ただし、詩に限定しただけではヴィクトリア朝文学の「埋もれた風景」を明らかにできないとの判断にもとづき、本書は、その第二部に、より広範な視野からの検討に備えて、ワーズワスとディ・キンシィとの科学をめぐる関わり、アーノルドの初期評論、ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』、ヴィクトリア朝の大衆演劇をそれぞれ論じた四編の論文が収められている。

では本書は、ヴィクトリア朝文学のどのような側面に照明を当てて、その特質の解明を行おうとしているのだろうか。この時代の文学は、仮にヴィクトリア女王の在位期間(1837-1901)に限ってみても六十数年の長期にわたっているし、また、その前期と後期において文学・芸術のうえに現れた傾向には大きな変化が見られるから、その多様性を生み出した特質は易々と把握できるものではなかろう。しかし、本書は、このヴィクトリア朝文学における詩学、美学、倫理、流行などの変貌・大転回にもかかわらず、この文学を形づくった人々には、「美の創造に関わって等しく一貫した持続的な意志と姿勢」が窺えると主張する。「はしがき」は、この点を明確に述べているから、引用しておこう。「それは急激に変貌する現実に対処あるいは対峙しつつ、その中から新しい現実的な美を見出そうとする極めて倫理的で実践的な意志と姿勢であった」。タイトルの「埋もれた風景たち」とは、ヴィクトリア朝文学を貫くこの「意志と姿勢」のことに他ならない。本書を構成する十三編の論文は、この面に照明を当てて、ヴィクトリア朝文学の読み直しをめざすのである。

ヴィクトリア朝英詩の特質を見てゆくうえで注目すべきは、その詩が二つの側面から成り立っている点である。ヴィクトリア朝の詩は、社会的、文化的問題に大きな関心を示している。愛国主義などの政治的信条、宗教的信仰、神学、科学思想、セクシュアリティ、社会改革、哲学・思想などの問題は、ヴィクトリア朝詩人の重要な関心事であって、このみずからの関心を詩に取り上げようとする。ヴィクトリア朝英詩を代表する三大詩人、テニスン、ロバート・ブラウニング、アーノルドの詩を想い浮かべれば、この特徴は容易に納得できよう。

もう一つの側面として見逃してならないのは、詩という文学形式・ジャンルを根本的に問い直そうとする動機が窺えることである。これは、ラディカルな場合は、詩語・詩形式への実験的変革から詩そのもののもつ本質的機能への反省・検討となつて、ヴィクトリア朝英詩に現れる。ロバート・ブラウニングの「劇的独白」、ホプキンスの特有な韻律、それに多くの詩人の詩作品に窺えるビルドゥングス・ロマン的モチーフ、小説的発想などがその代表例であろう。

こうしてヴィクトリア朝英詩は、文学・芸術の外の世界、文学を取り巻くコンテクストに対して密接な関わりをもとうとする動機の強い性格の詩でありながら、この「外」への関心を詩学の次元において解決しようとするところに、その特質が位置づけられよう。これは、詩学と社会的問題との、文学・芸術自体と思想・倫理的関心との葛藤といえようが、この葛藤から発動される動的なエネルギーがヴィクト

リア朝英詩のインパクトと魅力を形づくっているのは言うまでもなからう(参照。Joseph Bristow, ed., *The Cambridge Companion to Victorian Poetry* (Cambridge: Cambridge UP, 2000))。

ヴィクトリア朝の小説は、なるほど詩と同じく社会的問題、文学の外の世界への関心をもっていたにしろ、「小説の詩学」そのものへの実験的関心は果たしていかであったろうか。飛躍的に肥大化した中産階級からなる読者層の趣味にコントロールされて、ヴィクトリア朝小説家は、みずからの小説の詩学を貫き通すにはよほどの覚悟が要ったにちがいない。サッカレー、ディケンズからハーディに至る偉大なヴィクトリア朝小説家といえども、この新興読者層が激しく求めてくる通俗的な「小説の詩学」と悪戦苦闘している。

その点で、ヴィクトリア朝詩人たちは、詩を読む読者層からより自由な環境を確保できていて、みずからの信条にもとづき実験的詩学を展開できたのではあるまいか(参照。Isobel Armstrong, *Victorian Poetry—Poetry, Poetics and Politics* (London: Routledge, 1993))。

本書『埋もれた風景たちの発見』は、このようなヴィクトリア朝英詩のもつ二つの側面を強く意識した論考である。それは、すでに見たように、ヴィクトリア朝文学のなかに「新しい現実的な美を見出そうとする」面と「極めて倫理的で実践的な」面との両面を見据えようとする姿勢に確認できよう。

本書を構成する個々の論考の紹介は、詳しく行なうスペースはないが、簡単に触れておこう。ジョン・クレアが後期の詩において詩人としての復活を果たした想像力のメカニズムを解明した論(川口紘明氏)、『イン・メモリアム』等の中期の詩を取り上げてテニソンの詩人としての言語論の孕む問題を考察した論(里麻静夫氏)、アーノルドの信仰に関わる錯綜した問題性を『エトナ山上のエムベドクレス』において考察した論(兵藤雅子氏)、昨今フェミニズムが声高に叫ばれるにもかかわらず「家庭の中の天使」の由来する作品まで遡って読まれることが少ないその原詩、パトモア『家庭の中の天使』を丁寧に分析した論(海老根宏氏)、クリスティーナ・ロセッティにおける女性と信仰の関係を論じた論(坂川雅子氏)、ロバート・ブラウニングの劇的独白とモダニズムの詩学との密接な関わりを論じた論(原孝一郎氏)、ウィリアム・モリス『地上の楽園』における楽園のヴィジョンとディレンマとの絡み合いを考察した論(上坪正徳氏)、『ドイッチュランド号の難破』を詳細に分析してホプキンスのインスケイプの詩学を明らかにした論(笹川浩氏)、ワイルドの代表的詩作品を取り上げ伝統的なものとモダニズム的なものとの並存のありようを明らかにした論(土屋繁子氏)、ワーズワスとディ・キンシィの詩学が自然科学上の発見と密接な関係にあることを論じたもの(井上美沙子氏)、アーノルドの初期評論の検討を通して批評家への転身を跡づけた論(中川敏氏)、『ミドルマーチ』における理想と現実の交錯を説き明かした論(松本啓氏)、ヴィクトリア朝のメロドラマの創造力の

ありようをダグラス・ジェロルドやディオーン・ブーシコーの通俗的演劇の分析を通して明らかにした論(井出弘之) からなる十三編である。

本書は、中央大学に設けられた研究会「ヴィクトリア朝の芸術と文化」の研究成果をまとめた研究叢書で、総ページ数 650 ページに達しようかとする大部の論文集である。ここに収められた諸論文は、たつぷりとスペースを与えられ、400 字詰め原稿用紙に換算して 50 枚から 100 枚、いや中には 100 枚を越える紙数を自由に使って悠々と論考を展開しており、力作揃いである。今日このような制約の自由な論文発表の場はなかなか見つけられそうにないので、本研究会および本叢書はきわめて恵まれた環境にあると言える。

最後に、この浩瀚な書物に対してあえて望むことは、本書に満載されたヴィクトリア朝文学・英詩を見てゆくうえでの数々の重要なテーマやモチーフの中から、順にひとつひとつを選び出し、それらを中心にしてヴィクトリア朝文学のよりパティキュラーな相により強烈な照明が当てられた論文集が生み出せないか、ということである。そうした研究成果を、この研究会に次に期待したい。

村岡健次『近代イギリスの社会と文化』

(ミネルヴァ書房、2002 年)

小 関 隆

本書を通読し、評者が最も読み応えを覚えたのは各論部分(第 3~10 章)であった。国教会という著者にとって比較的新しいテーマを扱う第 10 章を除けば、これらの章はいずれも 1980-90 年代に発表されたものであり、そこで提示された知見は既に評者を含めた研究者の間の貴重な共有財産となっている。第 3 章では 1830-60 年代の中等教育改革を、第 4 章では 19 世紀後半のパブリック・スクールを特徴づけたアスレティズムを、第 5 章では薬業者がプロフェッションとしての薬剤師へと自らを確立していく過程を、第 6 章では 1871 年に廃止されるまで陸軍士官の地位を売買する制度がいかなる意味をもったのかを、第 7 章では陸軍士官学校の教育に見られるアマチュアリズムとプロフェッショナルリズムの相克を、第 8 章ではテムズ川の汚染問題に「行政革命」の波に洗われつつあったロンドン都市行政がどう対応したかを、第 9 章では 19 世紀に広く活用されたアヘンがいかにして規制・禁止の対象になっていくかを、そして、第 10 章では現代に焦点を合わせて国教会の機能を、各々論じていることから明らかなように、著者の守備範囲は特筆すべき広さ

にわたる。各々の章の内容を紹介・吟味する紙幅の余裕はないが、本書の価値の核心はこれらの各論にこそあり、評者も改めて多くを学ばせてもらった。

本書の総論部分で、著者は「二階級史観」(p.5)という立場を打ち出している。「一つの明確な歴史時代」(p.2)としての19世紀=「近代」は「史上稀に見る明確な三階級社会」(p.30)だったが、その「不可欠の造形要素」(p.3)となったのはジェントルマンと中流階級であった。そして、ジェントルマンと中流階級は「対等に認識し評価」(p.3)されねばならない。つまり、明らかに「ジェントルマン主導・支配」説(この命名は評者による)の立場から議論を展開した著者の前著『ヴィクトリア時代の政治と社会』(1980年刊)とは異なる姿勢が示されるのである。「二階級史観」を提唱する著者からすれば、主たる「造形要素」を中流階級に見る大塚史学やホイッグ史観も、ジェントルマンに見る「ジェントルマン資本主義」論も、いずれも19世紀イギリスの叙述には適用できないことになる。

前著が政治と文化の両面におけるジェントルマンの影響力を強調する内容のものだった以上、「二階級史観」を掲げる本書になにより求められるのは、ジェントルマンと「対等」な位置を占めるべき「一九世紀文化の担い手としての中流階級の意義」(p.26)を説得的に論じることであろう。「二階級史観」の成否はこの点にかかっている。そして、前著以来、著者の中流階級論において一貫して重視されているのが、「忘れられた中流階級」(p.6)たるプロフェッションである。著者によれば、「一九世紀後半から二〇世紀にむかって、プロフェッションが中流階級の主導的意義をもつようになるのは明らか」(p.6)であり、それとともに「プロフェッションのイデオロギー」=「公共精神」が影響力を拡大して、世紀転換期には「ビジネスの利益追求主義とか利己心との対比において、プロフェッションの公共精神が推奨されるようになる」(p.47)。

もう一つ、本書を通じて印象的なのが、主として大陸諸国との比較を通じて、「イギリスの特殊性」とでも呼ぶべきものを析出せんとする著者の姿勢である。「イギリスという文化的個体」「歴史的個体の特性」の解明こそが課題であると明言した前著のスタンスは、本書にも貫かれている。そして、「イギリスの特殊性」を論じる際にも、プロフェッションをめぐる議論は大切な役割を担っている。一例を引用しておこう。「イギリス・プロフェッションの資格確立制度の特色は、まさに「それぞれのプロフェッションがみずからをみずからの手でプロフェッションとして形成した」点にある...というのもプロフェッション資格の社会的な保証すなわちその資格の社会的権威の確立は、わが国の場合をも含めて通常国家試験制度を通じて行われてきたが、イギリスでは国家試験制度は行われず、プロフェッションの資格確立は、当該職業集団に属する成員の自助努力に、つまり自由放任(=レッセ・フェール)の原則にのっとって行われたからであった。」(pp.135-6)

総論が唱う「二階級史観」とのかかわりにおいても、著者が示す「イギリスの特殊

性」へのこだわりとのかかわりにおいても、各論の中で特に注目されるのはプロフェッションを扱った第5~7章である。著者が提示するプロフェッションの二類型を適用するなら、中流階級のプロフェッションたる薬剤師が第5章で、ジェントルマンのプロフェッションたる陸軍士官(及びその予備軍)が第6~7章で、扱われていることになる。

第5章は、「工業化とプロフェッショナリズムの進展に対応して...みずからの地位をいかにプロフェッションに高めるか」(pp. 7-8)という課題に直面した薬業者が、1850-60年代の国家干渉(毒物販売規制や薬剤師の国家登録、最終的には1868年の薬事法制定に至る)に先行する1841年にいち早く資格付与団体=薬剤師協会を設立して、つまり、国家の権威・権力を利用する以前に自助努力を基本として、プロフェッションの地位を獲得していく過程を検討する。このようなプロフェッション化のありようは、著者が追求する「イギリスの特殊性」を雄弁に例示するものである。そして、こうしてプロフェッションの地位へと上昇していった者たちこそが、19世紀後半には「中流階級の頭部」(p. 47)となり、イギリス社会の「造形」に大きな役割を果たすことになる。

陸軍士官はもともとジェントルマンの範疇に含まれる存在であるから、「中流階級の意義」を担うわけではない。それでも、アマチュアリズムとプロフェッショナリズムの相克を論じることを通し、ジェントルマンと中流階級の「相互のかかわり」(p. 3)という重要な側面を浮き彫りにしている点で、第6~7章はきわめて興味深い。陸軍は「ジェントルマン支配層の牙城」であり、士官はジェントルマンでなければならないという「理念の支配は絶対的といってよいほど」(p. 220)だったわけだが、興隆してくる中流階級を体制内に取り込み、陸軍指導層をジェントルマンが支配できる環境を支えていたのが、1871年の軍制改革まで残存する位階購買制であった(第6章)。さらに、位階購買制と並んで、ジェントルマンのアマチュアリズム(プロフェッショナリズムの反対概念)も、「陸軍士官のプロフェッション教育の阻害要因」(p. 222)として作用した。ウリッジとサンドハーストにおける陸軍士官教育の前提にジェントルマン的なアマチュアリズムと結びついたリベラル・エデュケーションが位置づけられ、陸軍士官というプロフェッションはいわば「イギリス的」な特徴を帯びることとなった(第7章)。

薬剤師を含む中流階級のプロフェッションの人々は、「国家資格試験の形式を通じて...国家に依存するのではなく、基本的には各プロフェッションが国の認可の下にみずからの社団を設立して資格試験と資格の付与を行い、あとは市場の競争原理に委ねる形」で「公共的な社会的資格」を確立したという意味で、「筋金入りの自由主義者」(p. 36)でありうる。著者は、自由主義を「一九世紀中葉以降一九二九年の世界大恐慌にいたるまで」の「国是」(p. 36)とさえ呼んでいるが、こうした評価の1つの根拠を成すのが、「中流階級の頭部」となったプロフェッションが自由主義に帰

依したことだろう。自由主義は中流階級の「階級アイデンティティ」(p. 35)であるから、台頭していくプロフェッションから支持を得た自由主義の影響力を力説することは、当然にも「中流階級の意義」を強調することに連なり、著者の「二階級史観」の裏づけとして機能しうる。しかし、著者も認めるように、プロフェッションの台頭は「公共精神」の浸透をも意味したのであって、「一九世紀末から二〇世紀初頭の時期にイギリス自由主義の精神が衰退してしまったわけでは決してない」(p. 47)にしても、その重大な変質が生じたことは否定できない。「国是」たる自由主義が「公共精神」とどのようにかかわったのか、当然の疑問が浮上してくるが、この点についての明快な回答は提示されていない。こうした問いに答えるためには、本書では論及されないニュー・リベリズムの検討が不可欠であるように思われる。また、本書における自由主義の評価には小さくない揺れが見出されるため(たとえば、p. 108には「時代の風潮は...一八七〇年あたりを境に自由主義から帝国主義へとしだいに転換した」とある)、「二階級史観」を支えるべき「中流階級の意義」に関する叙述はやや不明瞭な印象を残す。

イギリスを「文化的個体」として捉えようとするスタンスは、いうまでもなく、「歴史の普遍的法則」の典型的事例としてイギリスに向かう姿勢への批判を含蓄しているものであり、前著刊行の時期にはそのような批判が重大な意味をもった。また、「比較史の観点」(p. 58)を重視し、ヨーロッパ的なコンテキストの中で「イギリスの特殊性」を論じようとする著者の態度も、ほとんどの場合、比較対象がフランスとドイツに限られてはいるものの、貴重である。ただし、近年の研究が一国史という枠組みの自明性に重大な疑問を投げかけていることを思えば、国対国のレベルの比較に終始していることへの批判はありうるだろう。第3章には、「イギリス(=イングランドとウェールズ)」(p. 57)との限定が見られるが、こうした限定を施したうえで、やはり「イギリス」が抱えるローカルな異質性への視点は弱いといわざるをえない。さらに、スコットランドをも視野に収めるならば、プロフェッションにかかわる法令だけを見ても、イングランドとの間に小さくない相違が浮上する。プロフェッション研究を1つの支えに本書で析出された「イギリスの特殊性」は、もっと多様なレベルの考察を加えることによって、さらに陰影に富んだ姿を現すだろう。

周知の通り、中流階級をはじめとする中間層の研究は近年最も活発に新しい成果が発表されている分野の1つであるし、一国史とは異なる分析・叙述の枠組みをどうつくるのかという問題に関しては依然として試行錯誤がつづいている。したがって、評者が指摘した論点は、著者だけではなく、評者自身をはじめとする研究者が共通して(アプローチの仕方はさまざまであるにしても)取り組むべき性格のものである。そして、約20年間にわたる研究を集成した本書が、こうして今日の研究者が関心を寄せる論点に触れてくるという事実には、研究者としての著者の歩みの誠実さが示されているように思われる。

Rupert Christiansen, *The Visitors: Culture Shock
in Nineteenth-Century Britain*
(Chatto and Windus, 2000)

大 嶋 浩

1820年から1914年までの約100年間の時期に、英国を訪れた注目すべき異邦人の体験や逸話が巧みな筆致で描きだされた本である。主として取り上げられる訪問者たちは、フランスの画家ジェリコー、ドイツの音楽家ワーグナー、米国の哲学者エマーソンの3個人と、米国の霊媒たち、オーストラリアのクリケット選手たち、エキゾチックなプリマドンナとダンサーたちという3グループである。これら異質な6種類の者たちの訪問の目的には大抵、「この世で最も裕福で強大な国を金銭的に利用しようという打算的なもの」が認められるが、彼らはそれぞれに「英国に提供すべき、新しきもの」ないしは「やっかいで危険なもの」を携えて到着し、現地の英国人を眩惑・当惑させた訪問者たちであった。それゆえ、各訪問者が英国で体験したカルチャーショックだけでなく、彼ら訪問者たちが逆に英国人に与えたカルチャーショックも問題となるのであり、本書の副題にあるカルチャーショックにはこの二重の意味が込められている。しかも、むしろ後者のカルチャーショックこそ、本書の主要部分をなすものである。

「序」に続いて、上述の6種類の訪問者が上述の順に、つまり、概ね訪英の年代順に、各一章ずつ独立して割り当てられた構成になっているため、興味ある章だけを単独に拾い読みしてもよいし、全体を通読すれば、ナポレオン戦争後から第一次大戦前までの英国の様子や雰囲気、趣味の変遷がそれなりに概観できるようになっている。どの章からでも読み始められる、読みやすい本であるが、その読みやすさはその構成だけでなく、本文の記述のスタイルにも負っている。若干の脚注と巻末には各章ごとに参考文献が付されているもの、本文中で言及・引用されている手紙や日記、参考書類の出典は明示されていない。また、その語り口もくだけた表現を多用した洒落なものであり、かつ、分析的というよりも逸話的・挿話的である。著者のクリスチャンセンは著名なジャーナリスト兼批評家であり、本書はアカデミズムの堅さとジャーナリズムの大衆性が適度に融合した、読みやすく面白いものに仕上がっていると言えよう。しかしその読みやすさは、ときに物足りなさを生じさせる。興味深い逸話などの出典の確認は巻末の参考文献を見ただけでは必ずしも容易ではないし、的確な逸話の紹介に見合う、突っ込んだ分析が望まれる箇所(例えばワーグナーの反ユダヤ主義の側面など)も散見されるからである。しかし、この点は本書の性格(多様な逸話を含む、読みやすく面白い読物)からいって無い物ねだりかも知れない。以下、各章の盛り沢山な内容のごく一部をかいつまんで

紹介しておこう。

第1章、1820年ジェリコーは『メデューズ号の筏』をエジプシャン・ホールで公開するためロンドンにやってくる。多くの観客が「美的高揚ではなく、身震いするような恐怖を味わうことを期待して」会場に殺到し、ジェリコーに800ポンドの純益(当時の上級文官の年収に等しい額)をもたらした。しかしその後、その絵がダブリンへ巡業に出されたとき、あいにく同様の主題を扱った海洋回転パノラマと競合することになり、料金を値下げしてももはや観客が集まらなかった。一方、訪問したロンドンでの生活は芸術上、私生活上の問題で悩んでいたジェリコーに刺激を与えるとともに緊張からの解放をもたらし、旺盛な制作活動を促すことになる。例えば、当時新しい技法としてロンドンで流行していたリトグラフを使ってロンドンの貧しい者たちをあるがままに描き記録した、先例のない傑作を制作し、馬の主題の分野では英国の「スポーティング・ペインティング」の伝統に敬意を捧げながらも、その伝統を批判して自己の芸術を作り上げていった。

第2章、ワーグナーは3回(1839年[1843年という記述(p.43)は誤植であろう]、1855年、1877年)、ロンドンを訪れている。1877年の訪英で彼が169名編成の大オーケストラを指揮したとき、新聞等には前回の訪英のときと同様、好意的でない批評も掲載されたが、聴衆の入りは盛況であった。いまや世界的有名人名となっていたワーグナーは社交界の話題の種としてもはやされ、若いダンディーや小生意気で無愛想な「当世風の女性たち」を引きつけ、ワーグナーの音楽の内容そのものはよくわからなくとも、その音楽を聴くことが流行したらしい。一方、ワーグナーは、妻のコジモを伴ってグリニッジにシラス料理を食べにいった折、その帰路で目にした産業都市の風景に、「アルベリッヒ[ニーベルング族の長]の夢が実現したもの」を見て取り、強い印象を受けている。

第3章、19世紀の大抵の米国人の訪問者は、いわゆる「植民地的劣等感」^{コロニアル・クリンジ}に屈服すまいと心を決めて、非難に対してむきになったり勝ち誇ったりした結果、「威張り散らし、恥知らずに振る舞う、声の大きい、粗野なヤンキー」というお決まりの人物を『パンチ』やヴィクトリア朝小説に提供することになった。だが、エマーソンは彼らとはかなり異なり、偏見なく身軽に旅行できた「理想的な訪問者」であり、大衆や様々な組織ではなく、アーサー・クラフのような孤独な個々の人々にその影響を残した自由思想家であった。

第4章、19世紀中葉の宗教的懐疑の時代、科学と迷信の狭間に米国の霊媒たちによって叩音降霊^{スピリット・ラッピング}が導入され、超自然的なものへの関心をかきたてていった。ディケンズはメスメリズムには強い関心を寄せたが叩音降霊には不信の念を表明し、エリザベス・ブラウニングやブルワー=リットン、サッカーレーなどは降霊会に出席して心動かされた人たちであった。専ら上流階級の私的サロンで活動して成功を収め、ミセス・ライアンに関わる醜聞等を引き起こしているダニエル・ヒュームには日和

見主義的な俗物性が拭いきれないけれども、彼は科学者による彼の能力を調べる検査にも積極的に協力し、他の霊媒たちの行う欺瞞に対しては常に激しい怒りを示した、卓越した霊媒であった。ヒュームの引退後、「叩音降霊のアメリカ学派」と呼ぶものが英国社会に根付いていくことになる。

第5章、オーストラリアのアボリジニに対し非公式の大量殺戮がゆっくりと進行し、社会ダーウィニズムが浸透しつつあったヴィクトリア中期、アボリジニを保護するためのコミュニティが作られていくが、そうしたコミュニティ等で彼らの道德的教化の一環として採用されたのがクリケットである。1868年英国に遠征したアボリジニのクリケットチームは、英国国歌を歌う犬と同じような新奇なものとして多くの観客を引きつけ、126日間の滞英中、40箇所の都市や町で47試合を行い、14勝14敗19引き分けの成績を残した。帰国後、チームは解散し、アボリジニがヴィクトリア植民地から離れることも禁止されたため、「黒いオーストラリアと白いオーストラリア」を統合するのに役立ち得たであろうスポーツとしてのアボリジニのクリケットは下火になっていった。代わって、投手スポフォードを擁した、オーストラリアのいわゆるセミプロの白人クリケットチームが1878年と1880年に訪英して圧勝し、新たなセンセーションを巻き起こすことになる。

第6章、19世紀後半ロンドンのバレエは過剰衣装、過剰小道具による単なるスペクタクルを見せるものに成り下がっていったが、1911年バレエ・リュスの英国公演はロンドンの趣味を一変する。数多の観客が娯楽本位ではない「真面目な芸術」としてのロシアバレエの素晴らしさに我を忘れ、ファッションやインテリアデザインに「ロシアン・モード」が流行したのである。ロンドンはそれまで男性のバレエダンサーに関心を示したことはなかったが、ニジンスキーの大跳躍や妙技は人々を魅了し、やがて彼はバレエ・リュス崇拜のアイドルとなっていく。とりわけ彼を唯一無二なものとしたのはその両性具有性である。男らしさがなおも厳格に女性らしさと区別されていた文化において、そのような性的歪曲は大層ショッキングで目新しいものであり、ほとんど承認しがたいものであった。しかしそれは紛れもなく感得されたのであり、すでにその兆しを見せていたホモセクシュアルな文化にとっては、ニジンスキーは強烈な夢想と好奇心をそそる対象となったのである。

このように、芸術(美術、音楽、舞踏)からスポーツ、哲学、心靈主義に及ぶ多様な文化ジャンルの、多様な国籍の訪問者にまつわる興味深い逸話を盛り込んだ本書は、19世紀英国文化を多面的に見ていこうとするときの格好の入門書となるであろう。すでに発表されている書評は概して好評であるが、この本が否認すると主張している偏狭な島国根性的な立場を著者のクリスチャンセンは具現化しているのではないか、という脱構築的な批判(*Victorian Studies* 44.4 [Summer 2002] の書評)も見いだされる。一見ヨーロッパ中心のであったりステレオタイプの再生産に見える記述のなかにどの程度著者のアイロニー等を認めるかによって、この批判の妥当性

は揺らいでいくように思われる。いずれにせよ、そうした批判もあることを念頭におきながら、これらの訪問者たちだけでなく、本書では触れられていない訪問者や訪問者以外の亡命者・移住者等のカルチャーショックの問題を今後更に渉獵することによって、本書の内容を一層豊かに敷衍・補完する作業を継続していくことが、本書の著者および読者に期待される課題であると言えよう。

最後に、本書の米国版は *The Victorian Visitors: Culture Shock in Nineteenth-Century Britain* (Grove/Atlantic) である。テキストの部分は同一であるが、米国版は掲載のイラスト数が少ないもの(米国版は8頁19葉、英国版は16頁38葉)となっていることを付記しておく。

Phillip Mallett ed., *Thomas Hardy: Texts and Contexts*
(Palgrave Macmillan, 2002)

福岡 忠雄

限られた紙幅では本書のすべての論文を紹介するわけにはゆかない。以下は私のきわめて恣意的な選択であることをまずお断りしておきたい。

最初に、Toru Sasaki の ‘*A Laodicean as a Novel of Ingenuity*’ を紹介する。Toru Sasaki とはもちろん佐々木徹氏のこと、Gillian Beer や Michael Millgate などそうそうたる大家に伍して氏の名前が見えることは正直うれしい。佐々木氏が分析の対象として取り上げた作品は *A Laodicean* である。ハーディは1912年に新しい全集を出すに当たって、自分の作品を3つのカテゴリーに分類、この作品はその中の ‘*Novels of Ingenuity*’ の範疇に入るものとされ、「それゆえにマイナーである」とされてきたものである。この「メジャー」と「マイナー」の分類は近年 Peter Widdowson を代表とする新しいハーディの読み手たちから強い批判を受けているが、佐々木氏はその問題に深入りせず、その分類を逆手にとって、この小説が真の意味で *Novel of Ingenuity* であることを精緻な分析で論証しようとしている。

氏は、この作品の様々な incidents の中には、作品の他の部分とのつながりに欠け、単にその場限りのセンセーショナルなお膳立てだけに終わっているものがあることを率直に認める。例えば、その代表とされるのが主人公 Somerset が Stancy Castle の塔の奈落に転落、抜け出せなくなる場面である。白骨の散乱する典型的ゴシック的状况の中で、彼は壁に書かれた de Stancy と W. Dare の名前を発見。これがこの物語の後の展開に重大な伏線になるとの予感を読者に抱かせる。ところが実

は、その後のプロットの展開においてこの事実は一切触れられないのである。このために、これまで「プロットにも、詩的ビジョンにもまったく貢献しない」と批判されてきた箇所である。それに対して氏は、Jean Brooks の言う poetic underpattern の観点を援用、その観点からすればこの箇所が、この物語の他の部分と、エコーあるいはパラレルの効果を通して、緊密につながっていること、つまり「隠されたパターン」を形成していることを指摘する。即ち、Somerset の転落・監禁が語られる部分での ‘walled in’, ‘shut-up’, ‘depth’ などの語は、彼の Paula への恋情、その結果としてのこれとはまったく別種の「監禁」のエコーとなり、パラレルとなって、poetic underpattern として機能しているのだという。この別種の「監禁」とは Paula へのひたすらロマンチックな恋情に「閉じ込められた」主人公の状況を指す。一方、男性主人公 Somerset のロマンチックな幻想に対して、ヒロイン Paula の特徴は、その捉えがたさ、不透明感にあるという。しかも、ハーディ自身が彼女のこの tantalizing trait に加担、むしろ彼女のコケトリーを楽しんでいるところがあるために、それに翻弄される Somerset と一緒になって読者も翻弄される仕組みになっているという。この小説が「巧妙に仕組まれた小説」(novel of ingenuity) だというのは、単に入り組んだプロットにあるのではない。その点では、細部においていくつか破綻・矛盾が見られる。そうではなくて、むしろ小説自身がヒロインの ‘elusive charm’ と競い合うかのように、男性主人公のみならず読者をも、その捉えがたさの魅力のなかへ誘い込んでゆく「巧妙さ」にあるのだと指摘する。

マイナー小説をどう読み、どう評価するかは難しい問題である。たちどころに「リアリズム」、「偉大な伝統」、「価値判断」などの複雑な問題に直面することになる。佐々木氏のこの論文は、それらの問題を十分意識しながらも、それを一応先送りして、なおかつ有効な読み方があるとすればどういう読み方があるか、それを具体的かつ説得力をもって示してくれる優れた一例となっている。正に ‘essay of ingenuity’ である。

次に、*The Mayor of Casterbridge* を、雑誌連載当時の挿絵との関係で論じた Pamela Dalziel の論文 ‘Whatever Happened to Elizabeth Jane?: Revisioning Gender in *The Mayor of Casterbridge*’ を取り上げてみたい。*The Mayor* は 1886 年 2 月から 5 月まで毎週 1 回合計 20 回に分けて *Graphic* 誌に連載された。この連載には必ず、ハーディの小説に挿絵を描いた画家の中で最高と詠われた Robert Barnes の手になる挿絵が添えられた。ところが論者に言わせれば、Barnes は単なる挿絵画家にとどまらず、このテキストを一般読者がどう受け取るか、その反応を左右するいわばレンズの機能を果たしたと言う。すなわち、彼が描いた挿絵はそのままこのテキストの一つの解釈となり、読者の読み方をリードすることになったのである。それだけではない。もっと問題なのは、結局はそれら挿絵が作者ハーディ自身にも影響を与え、その後の大幅な改訂につながったことである。

Barnes が「描いた」*The Mayor* の最大の特徴は、3人の女性登場人物をすべてテキストで描かれている以上に gentle woman にしたことである。というのも、このテキストを読んだある出版顧問が、「上流階級の登場人物がいないために興味が欠ける」と評し、それを単行本出版を計画していた編集者が気にして、Barnes にその点を工夫して欲しいと要請したからである。それだけでなく、前述したように、ハーディ自身が単行本のための校訂作業中に Barnes のイメージをほぼ踏襲する形でテキスト自体を書き換えたことにある。その事情は Susan も Lucetta も同様だが、筆者がこの「影響」関係で最も重要視するのは Elizabeth-Jane の場合である。Elizabeth-Jane は二人いると筆者は言う。一人は連載テキスト中の彼女、もう一人は単行本版の彼女である。連載テキストの彼女は、生气・活力に溢れ、時に衝動的で、場合によっては Henchard にさえ食ってかかるほど勇ましい。ところが単行本になると、彼女は専ら従順で控えめでか弱い存在、要するに当時の理想的「女らしさ」のすべてを具現したものになる。この「変身」に大きく寄与したのが Barnes の挿絵で、彼は、ハーディと違って、当時の社会通念・標準的道德のすべてに従順に、それらが要求する「趣味」に合わせるべく登場人物を描いたのである。そして、それが結局ハーディを感化し、連載テキストとは大きく違った Elizabeth-Jane を誕生させることになった。現在の多くの読者・研究者が読む *The Mayor* はほとんどが単行本版である。ハーディ描くヒロインがフェミニズムなどの時流に乗って次々と新しい解釈を与えられ、彼女たちが秘めている subversiveness が認められている中であって、Elizabeth-Jane だけはほとんど議論に上らない。それは、Barnes の影響の下、結局当時の社会通念、当時の女らしさの典型と化せられた結果であると筆者は言う。

文字テキストと映像テキストとの比較、その両者の双方向的関係を扱った論文は今では決して珍しくない。わたしもハーディのイラストレーションについて似たような論文を読んだ記憶がある。しかし、この論文は連載テキストから単行本出版へ移行する経緯、挿絵画家の履歴や思想傾向などについて資料的厳密さを期しながら、ハーディが自分の書いたテキストを挿絵に影響されて自ら改変してゆく経過を明らかにしている点できわめて興味深いものとなっている。

Richard Nemesvari, 'The Thing must be Male, we suppose' は、*Tess* を Herman Melville の *Billy Budd* と並べて論じたものである。この意表をついた組み合わせが、単なる偶然の一致による類似点の指摘に終わっていないのは、両作品が、当時歴史的転換点に置かれていた masculine identity という文化的・イデオロギー的問題と関わっている点で基本構図を同じくすると指摘していることにある。19世紀後半、New Woman の運動などの影響もあって、「男らしさ」の理念が危機にさらされた。それまでの男らしさは、大衆演劇に登場する色悪的タイプが演じて見せたような、次々と女を征服することによって誇示された男らしさであった。これを代表するのが Alec で、彼はたびたび大衆演劇の典型的猥色家と酷評されるが、むしろその造

形は、当時の一方の男らしさの通念を具現するために計算されたものであったと筆者は言う。しかし、時代の推移とともにこのような男らしさが批判されるようになり、むしろ、性的欲求を極端に抑制するタイプ、性的ストイシズムを実践する禁欲家が新しい男らしさの具現者とみなされるようになった。それを体現しているのが Angel である。前者は力で、後者は知性で女を押さえ込む。しかし問題は、この二つの種類の男らしさはいずれもその表面下に、男らしさの虚構が切り崩されるという恐怖感を抱えていたことで、Alec は Tess の毅然とした拒否に遭い、自分の男らしさがもはや通用しないことを悟らせられる。一方、ひたすら禁欲主義を押し通すことで新しい型の男らしさを実践しようとする Angel は、Tess によってかき立てられた欲望に危機感を覚え、Tess の存在をいたずらに抽象化・神話化し、desexualize することによってセクシュアリティの危険を逃れようとする。この、Tess をはさんだ Alec と Angel の三角関係を通して表面化した masculine identity の危機、その構図はそのまま (hetero- と homosexual の違いはあるものの) *Billy Budd* において、Billy をはさんだ Claggart と Vere の三角関係にも見出されるものであり、そのことは、この問題が当時の英米文化の中で歴史的な重要性を持ったものであることをうかがわせると筆者は言う。既に述べたように、比較論は往々にして、偶然の一致を拾い上げ類似性を数え上げた上で、結局「しかしながら、違うところは違うのであって」などという結論に陥りやすく、何のための比較かと思わせられることが多いが、この論文ではそのような弊に陥ることなく、両作品の類似・対象が主論点と緊密に関わった形で論じられていて極めて興味深い考察となっている。

まだまだ紹介したい論文は多い。ハーディの作品のすべてに横溢する光と闇のモチーフと彼の人間観との関係を論じた Michael Irwin の 'Seen in a New Light'、仮借ない時間の進行の中にあって生はいかにすれば持続可能か、「過去に生きる」ことはそれへの答えとなりうるかを主論点に、彼の時間観・死生観との関係を論じた Beer の 'Hardy: the After-Life and the Life Before'、生物学的雌雄関係の原理へのハーディの理解と、それをそのまま人間の男女関係に当てはめることへの抵抗を論じた Angeliqne Richardson の 'Hardy and Biology' など。しかし、残念ながら紙幅がつかた。ハーディは既に論じつくされたという人もいる。しかし、これほど斬新で多彩なハーディ論の数々を目の当たりにすると、「ハーディ」は決して論じつくされてない、読み方次第でまだまだ新しい「ハーディ」が現われそうな、そんな期待を抱かせる論文集である。

Linda Nead, *Victorian Babylon: People, Streets and Images
in Nineteenth-Century London*
(Yale University Press, 2000)

久田 晴則

本書は Victoria 朝後期文化における modernity(現代性)の実態を調査研究したものである。副題から察せられるように、本書には 19 世紀 London の人々、街路等の挿し絵や画像がふんだんに取り入れられており、その数 85 枚(内 20 枚は色刷り)を数え、体裁は変形 B5 版、紙質は最上質、全重量は 1.2 kg にも。著者 Linda Nead は London 大学は Birkbeck College の美術史教授。従って画像の選択の多様と配置の仕方及び部分拡大による(“Detail of Fig. 30”のように)それらの解釈に美術史教授の鋭い絵解きの眼が光っている。

Introduction は本書全体 251 頁のうち 10 頁にすぎないが、その 10 頁の中には著者の論考の観点とその根拠が縷々提示されており、それらの理解なしには本論の理解は不十分となる。

表題の“Victorian Babylon”とは何を指すのか。著者の言う“modernity”の意味するところは何なのか。この研究を 1855 年頃から 1870 年までの期間の London に限定したのは何故なのか。これら 3 点は互いにどう係わっているのか。大英帝国の首都 London の栄華を“the Modern Babylon”と称する記事を *Temple Bar* (1862) の中に見つけた著者は、Victoria 朝 London の実態を検証すると、その本質には常に“uneasy images”(p. 4)、つまり、都市改造の現在と歴史的過去の双方に対する強い意識が生み出す「不安」が明白に存在することに気付く。目的を持った動きの現在(直線の大通りの建造、速やかな輸送方法の実践など)に対する方向性喪失の迷路の現状(古くからの曲がりくねった小路の網、ぶらつく人の群れなど)という相反するベクトル この状態こそが‘Victorian Babylon’だと言う。そしてこの状態は「都市の変容で生じる明瞭な体験様式」(M. Berman)であり、それが“the nature of London’s modernity”(p. 4)だと著者は定義する。

1855 年からの 20 年間に研究対象を限定したのは、55 年に The Metropolitan Board of Works(以下 MBW と略す)の設立が強い引き金となり London が改善と近代化の新時代へ突入しその結果 London は modernity の様相を顕著に示す時期だからだと言う。MBW は体系的な下水道の建設及び道路の拡幅化・直線化などの実現に向けて London 全体に地図、断面図、図解による合理的秩序の網をかぶせたが、都市改造は、現実には、不揃いで未解決のまま集積されて進み、「多様にして未解決な歴史的経過」が「相対的に配置されている観」(p. 5)を呈していた。「clean’な秩序の追求(地図製作・都市計画の空中展望)は、常に内部に、その他我としての無執

序、幻想、汚れ' ob-scene' なるものを抱え込んでいる」(Dr Certeau) ののである。そして著者は、注目すべきことに、過去、現在、未来の多重的様相からなる modernity の実態を、ハンカチのメタファーで、「しわくちゃのハンカチ」と称し、modernity での時間のあり方を、Michel Serres の言を引用して、「大小様々なしわの寄った時間 (a time that is gathered together, with multiple pleats)」(p. 8) とまとめている。

「しわくちゃなハンカチ」としての modernity の様態に関して、著者は3つの「部分 (PART)」に分けて論じていくが、各論点を「部分」と称したのは各部分が London の modernity 全体を成す一部である、すなわち全体を編み上げている「子なわ (strand)」(p. 5) であるという認識を著者が持っているからだと考えられる。

PART 1 MAPPING AND MOVEMENT (pp. 11–80) : 19世紀中葉の London は動きと循環の理想を追求した時代だったという観点に立って、地図作りと水というテーマが展開される。地面の傾斜度と水位を記入した The Ordnance Survey of Maps の出現が下水処理体系の実現を促した、しかし一方で、路上では募る一方の閉塞空間が人・物の動きを滞らせた。地上・地下ともでも“a gigantic building-site”と化した London は、人々の心に、旧・新の絶え間ない変動・喪失による荒廃感と獲得による勝利感の間に生じる不安や落ち着かない緊張 60年代の modernity の実態を強いた。上・下水道の設置と大通りの建造が、獲得による勝利を示す事例として取り上げられ (*1 Maps and Sewers*)、一方不安や緊張に関しては、その最も明白な事例として、“a whimsical but also disquieting image of metropolitan street life” (p. 47) を描出しつづけた Arthur Boyd Houghton の絵画が提示される (*2 Great Victorian Ways*)。他に60年代の London それ自体の特徴が視覚の観点から縷々概説された (*3 Speakers of the Eye*) 後、これまで男の視点でしかなかった flâneur に中産階級の若い女性の視点が加わり、「視姦」の対象になり始めた点が指摘され (*4 The Rape of the Glances*)、それは更にこれら“new femininities”の中で具体的に2人の女性の路上歩行者の視線が追跡される (*5 A Narrative of Footsteps*)。最後に、Henry Mayhew は Balloon による上空体験するが、この体験ががえって街路の知識を一層深めさせることになった経緯が語られる (*6 Balloon Ascent*)。

PART 2 GAS AND LIGHT (pp. 81–146) : 夜の町一面に広がるガスの光の海を営利の目的で上空から見下ろす試みが Cremorne Pleasure Gardens で行われ夜の行事の一つとなっていった経緯が取り上げられる一方で、ガス灯の海の中では“a mode of visual desire” (p. 87) と化した街路が flâneur を特定の快楽へ引きつけていった経緯が論じられる (*1 A Night Ascent*)。市内の現実として、ガス管の埋設がもたらす都市空間の大混乱とガス漏れによる惨事は「夜に昼間」を獲得するための代価がいかに高かったかを示すものであり、この観点が何枚もの視覚的例証で論述される (*2 Daylight by Night*)。美術史家の眼は、しかしながら、ガスの不安定な炎が創造する夜の夢の映像、即ち、昼間の都市の論理とは全く別の空間論理に集中し、昼間の

見慣れた場所を奇妙で不慣れな世界に変容させるガス灯の力を説く。この力を著者は「ガス灯の詩学 (the poetics of gas)」(p. 103) と称するとともに、次いで、このガスの炎の持つ神秘について、その虜になった多くの文学者、哲学者、現象学者たちの証言や解釈を取り上げる (*3 Secrets of the Gas*)。そして夜の帳が降りた後 London の市内に漲り始める「新しい活力」で、その最たるものとして、Cremorne Pleasure Gardens の最盛時の実態とやがて迎える閉園の顛末が、40 頁近くの頁数と多くの映像を使って、詳論される (*4 Cremorne Pleasure Gardens, 5 The Last of Cremorne*)。大工 20 人、舞台装置製作人 6 人、塗装工 5 人、ガス係 12 人を抱え込んで維持発展に努めた Gardens は複合産業として “a mini-metropolis”(113 頁) だったと言う。気球の打ち上げ、劇場、演芸場、夕食室、舞踏場の一つ一つを絶大な効果でもって演出したのがガス灯だったのだ。

PART 3 STREETS AND OBSCENITY (pp. 147–215) : 19 世紀に入っの印刷技術と写真術の発展と導入がこの新しい文化の形態を急速に成長させ、その安価で広範な普及が極めて官能的で退廃した大衆文化を送り出す結果になった。有識者はこれを “cultural poison”(p. 149) あるいは “a public nuisance”(p. 151) と決めつけ、首席裁判官 John Campbell は Campbell’s Obscene Publications Act の制定とその施行に狂奔した (*1 Moral Poisons*)。次に著者は obscenity の集まる空間の代表格として、小路 Holywell Street に焦点を当て、その通りの重層した modernity の実態を 1 枚の地図と 13 枚の visual images を使って読み解いていく。この通りこそは「動脈瘤をかかえこんだ空間 (a spatial aneurism)」(p. 163)、あるいは「modernity 特有の逆説を豊かに表明する一つの表れだった」(173 頁) からだという (*2 Holywell Street: The London Ghetto*)。そこで著者は、長らくユダヤ人街 (ghetto) だった Holywell Street が、19 世紀に入ると、ユダヤ人街に加えて、William Dugdale に代表される pornography 出版者の出現と活動で “impure books”(p. 178) の汚染地帯となっていく経緯(それ故 Campbell の反ポルノ法)を詳説し、“clean progress of modernity”への体系的な動きに対抗する “physical and moral antithesis”(p. 179) だった実態を浮きぼりにする。この汚染地帯には、意外にも中流階級の女性たちが多くいたことを指摘した著者は、掲載された水彩画、油絵、筆墨画の中に女性の挙動及び視線の意味を読み取り、*The Daily Telegraph* (17 June 1854) の記事からの引用でこの事実を実証する。“furtively peeping in at these sin-crammed shop-windows, timorously gloating over suggestive title-pages”(p. 184) と続く記事に Holywell Street の obscenities を凝視で食べ尽くさんとする “respectable, middleclass women” の飢えた視線を読み取っている。ついで著者は、Holywell Street が狭い路地から立法府の中心へ組み込まれていった経過、この路地での反ポルノ法による初の逮捕の事例、Temple Bar とともにやがて Kingsway and Aldwych 建造で地上から消えていくことになる点を取り上げ (*3 From Alleys to Court: Obscenity and the Mapping of Mid-Victorian London, 4*

Temple Bar)、そして最後に、過去、現在、未来を物理的、心理的な系統で結び付けている、人を圧倒せんとする廃墟の光景 Victorian Babylon の姿 は、まさしく、“modernity”の経緯と現状を解き明かすための「鍵 (cipher)」だったと結んでいる (*5 Reflections on the Ruins of London*)。

この書物は、国会法令、文学、新聞報道、私的な手紙類、地図類、絵画、広告類、発禁書類関係等々多くの多様な文献と図版に頼る形で出来上がっており、著者 Lynda Nead はそれらの資料を美術史研究者特有の慧眼でもってきちっと読み解き、水、交通、商品、人の動きに対する都市改造者の努力、ガス照明が市民の余暇に与えた強い衝撃、そして pornography という新しい形の大衆映像文化の出現とその拡大に係わる obscenity の問題(とその規正の動き)という3つの論点を、学際的研究の態度で、具体的に詳しく論じ、Victorian Babylon を浮き彫りにした。すなわち、「modernity は the image of ruin の上に築かれていった」(p. 215) その重厚な経緯を生々しく実証的に論述したのである。Victoria 朝研究で、かくも斬新な視点で Victoria 朝の実態を開示した研究には初めて直面したので、評者の受けた衝撃は誠に大きい。

Anna Krugovoy Silver, *Victorian Literature and the Anorexic Body*
(Cambridge University Press, 2002)

大田 美和

本書がヒステリーや狂気ではなく、拒食症 (anorexia nervosa) を取り上げているのは、前者については Elaine Showalter などの先行フェミニストの研究があるからというだけではないようだ。著者の動機として、第一に、拒食症は現代の普通の子が無縁ではいられない病であり、自分の教える学生にもこの病に苦しむ者がいるはずだという懸念がある。第二に、この病の背景には、ヴィクトリア朝の身体をめぐるイデオロギー、さらには、古代ギリシア以来の心身二元論があって、21世紀の進歩した社会に生きる私たちが古い身体イデオロギーにとらわれているという発見がある。第三に、このイデオロギーのしくみを学習させることで、拒食症の危険のある若者を救いたいという切実な欲求がある。

著者は、拒食症も文化的に決定された病ではないかという仮定に基づいて、議論を始める。最初に拒食症が発見されたのは 1873 年だが、以前にも似たような症例の報告があり、1820 年代から始まったという説もある。著者によれば、ヴィクトリア朝の拒食の文化には五つの特徴がある。1. ほっそりした女性の身体は美しく、

太った身体は醜い。2. 身体は意志に従属させるべきもの、自己コントロールすべきものだ。3. 良き女性とは、食欲も性欲もコントロールできる精神的な存在だ。4. ほっそりした身体は自己コントロール能力と精神性を体現する。5. ほっそりした身体は、中産階級、富裕さのしるしだ。

第一章 *Waisted women: reading Victorian slenderness* では、美容書、医学書、ファッション雑誌、少女雑誌、コンダクトブックを扱う。男女の服装の二極化、細いウエストと豊かな胸と腰という無理な体型の理想化、コルセットの流行をヴィクトリア朝の文化史として概括した後、コルセットの是非をめぐる論争を検証して、細いウエストが上流のしるし、純潔のしるしとされた世相をあぶり出す。ヴィクトリア朝文化と、19世紀後半の拒食症の直接的な因果関係は証明できないが、女性が身体を締め付け、男女別の栄養指導がある時代に、拒食症が見つかったのは偶然ではない。身体を食生活とコルセットでコントロールしようとする女性も、生理が止まるまで絶食する少女も、ヴィクトリア朝の「拒食のロジック」(anorexic logic) の範疇で行動していると言える。まだ拒食症になっていなくても、身体をコントロールしようとする女性の行動は、すべて「拒食のロジック」で説明できる。

第二章 *Appetite in Victorian children's literature* から、この「拒食のロジック」によるテキストの分析が始まる。分析されるのは、少女向けの人気雑誌 *Girl's Own Paper* の読者からの質問欄、John Ruskin と挿絵画家 Kate Greenaway の文通、Lewis Carroll の *Alice's Adventures in Wonderland* と *Through the Looking Glass* (以下、『アリス』と略記)である。少女雑誌の編集者は、やせたい少女に「神様にもらった体型を受け入れなさい」と答えており、この雑誌にはダイエットやエクササイズの記事がないのには驚く。まさに隔世の感があるが、この編集者の回答の背後には、出産のためには脂肪が必要という当時の医学の主張が隠されている。

Ruskin については、Greenaway との文通の悲喜劇が描かれる。二人とも、無垢でほっそりした少女に官能的な魅力を感じ、少女こそ理想の女という点で一致していたが、彼女の挿絵の少女は、実は、ほっそりした身体になりたかった願望の投影であった。一方、Ruskin は彼女の思慕にも、二律背反の少女礼賛にも気づかずに、挿絵の少女を賞賛しつづけた。

『アリス』の分析は、原典の再読を促す魅力がある。『アリス』は、女の子でも食べる喜びを非難されず、感情の起伏を隠さないという点で、同時代の児童文学とは異なる。しかし、著者は『アリス』が当時抵抗なく受け入れられた事実を重く見て、そのラディカルさを疑い、*Through the Looking Glass* の結末を分析して、Carroll でさえ拒食のロジックにとらわれていたと結論する。Carroll の特異性が拒食のロジックという文脈では矮小化されてしまうのはいかにも残念だ。彼はヴィクトリア朝の女性をめぐるイデオロギーを不快に感じた一方で、拒食のロジックにもはまっていたことになる。Ruskin が Greenaway の片思いに気づかないくらい拒食のロジック

に浸っていたことを思えば、Carroll を Ruskin の同類と考えるのは問題があろう。著者は、Foucault をたびたび引用しているが、どんな抑圧的なイデオロギーにもそれを転覆する要素が潜んでいるという彼の主張をどう考えるのだろうか。ところで、Carroll の特異性を強調するには、『アリス』と Christina Rossetti の童話 *Speaking Likeness* との比較が役に立ちそうだ。Rossetti はこの作品を『アリス』のようなものと考えていたが、それほど好評を得られなかったと著者は述べている。しかし、本書の論法では、両者は別々の章で扱われており、両者の比較ができないのは残念である。

第3章 *Hunger and Repression in Shirley and Villette* では、*Shirley* の Caroline と *Shirley* の食欲不振のルーツを作者の妹 Emily Brontë の死の直前の絶食に見いだしている。著者は Emily 拒食症説に惹かれつつ、一次資料の少なさから拒食症とは断定しない伝記を支持するが、Emily の絶食の *Shirley* への影響は推測できると結論づける。しかし、この結論は説得力に欠ける。*Wuthering Heights* は Catherine と Heathcliff の絶食という点で興味深いテキストなのだが、テキストとともに作家の言動を分析する本書の手法は、Emily を扱いかねている。*Wuthering Heights* の食については、宇田和子氏のユニークな研究(『嵐が丘』食生活調査)中岡洋、内田能嗣共編著『ブロンテ姉妹の時空』北星堂 1997 年所収)があるが、氏の研究に「拒食のロジック」を加えたら、どんなに面白いものができるだろうか。

Villette 論では、Paul Emanuel が Lucy Snowe に与える菓子や果物は、ヴィクトリア朝には性欲と結びついたという指摘が光る。注目すべきは、Genevra Fanshove の分析だ。彼女は Paulina とちがって家庭の天使ではなく、食欲旺盛な美人である。典型的な美人だが、父権制の寵児ではなく、反逆者ではないが、ジェンダーのコードに息苦しさを感じている。だから、彼女は Lucy の終生の友となる。これは、今までで一番説得力ある Genevra 論だ。

第4章 *Vampirism and the anorexic paradigm* では、Bram Stoker の *Dracula*、Sheridan Le Fanu の *Carmilla*、George du Maurier の *Trilby* を分析して、血を吸う行為をメタファーではなく、現実の食べる行為として読む。女吸血鬼は文化的にジェンダー化された「食べる」行為を通してジェンダーの基準を混乱させるという指摘は、拒食のロジックで読んだからこそ出てきた指摘であろう。最近、武田美保子氏が『新しい女』の系譜：ジェンダーの言説と表象』(彩流社、2003 年)の中で、*Carmilla* をヒステリー症とレスビアニズムという視点から論じているが、改めて吸血鬼文学の批評の可能性に目を開かれた。

第5章 *Christina Rossetti's sacred hunger* では、Rossetti 拒食症説を検討しながら、中世の断食中の尼僧の拒食症説を紹介し、19 世紀半ばの摂食障害の少女をめぐる論争(聖靈の憑依か、ヒステリーか、いかさまか)を検討する。そして、Rossetti の“Goblin Market”などの詩と童話 *Speaking Likeness* を分析して、彼女は宗教的な断

食の文化と、世俗的な拒食の文化の両方の影響を受けたと結論する。*Speaking Likeness* の分析は読み応えがあり、当時の読者にも現代の Rossetti 学者にも無視された作品の知られざる魅力を伝えている。

最後の Conclusion: the politics of thinness では、Introduction 同様に、教室でのエピソードが出てくる。また、*Vogue* 掲載の、モデルに拒食症の責任はないという主張に反論を試みる。ほっそりした身体を当然視し、体型やサイズの幅を無視し、身体を非人間的なもののみならず論調の、社会的な影響力を批判している。最後に、拒食症を奨励する危険なインターネット・サイトもある今日、フェミニストが果たすべき役割は大きいと結んでいる。

本書は直線的な論理展開をしているため、読みやすく、この分析方法を他の英文学のテキストにも応用したいと思わずにはいられなかった。また、日本の文化や社会における「拒食のロジック」も考えてみたくなった。たとえば、結婚後、平塚雷鳥ほど目立った活動をしなかった尾竹紅吉は、『青鞥』時代の「五色の酒」事件、嫁ぐ前の「ごはんを三杯食べるな」という母の助言、結婚後発表したエッセイで「正しいだしの取り方」を書いていることなど、拒食のロジックで面白い分析ができそうだ。また、伊藤比呂美の小説『ラニーニャ』は、母から娘に受け継がれる拒食症を描いているが、拒食のロジックを巧みに転覆している。他に、バイオリニストで米国在住の五島みどりの拒食症も忘れられない。

最後に、本書の参考文献のテキストの選び方について。たとえば、*Jane Eyre* は Bantam 版を使っているが、なぜ定本に依拠した World Classics 版ではないのか？

文化研究は文学の特権化を避けるから、テキストは何でもいいのか？ 著者は、現実社会と研究を結びつけるという姿勢から、テキストの入手しやすさを重視している (p. 21) ようで、この姿勢には共感できるが…。このようなテキスト選択、文学軽視ゆえに、著者は *Middlemarch* の Dorothea Brook を、ほっそりした青ざめた少女の一人に数える誤謬を犯している (p. 10) と批判したら、言い過ぎだろうか？

こう考えるのは、私が英「文学」研究者だからかもしれないが、文化研究はいかにあるべきかという問題にもつながることだろう。この点について、ヴィクトリア朝文化研究学会の諸賢からご教示いただければありがたい。